

イチゴ狩りの季節 車

イチゴ狩りのシーズンが本番を迎え、オールハウスの中で、たわわに実ったイチゴのはこの季節ならではの楽しみ。施設を食べ比べられたり、イチゴを使ったデザートもあり、週末はイチゴが盛りで、早めの時間帯に訪れるのがお勧めだ。

都心から車で約1時間。田園地帯にビニールハウスの一群が現れる。関東最大級というイチゴ狩り施設「越谷いちごタウン」(埼玉県越谷市)だ。ハウスに足を踏み入ると夏のような暑さで、端から端までイチゴの棚が並ぶ。

人気・希少品種 6種類を食べ比べ

同園では8棟のビニールハウスで約6万4000株のイチゴを栽培

「紅ほおり野薦めはうな甘だ。栽に黒ず産量が「練ね」。玉川南にイチ練乳の完全し



荒々しい

帝国の民都

かつて「東の電通、西の萬年」と称された広告会社があった。1890年、大阪に誕生した萬年社は、創業者がいち早く海外の広告事情を視察するなど、業界をリードする存在だった。だが残念なことに、その歴史は1999年で終わっている。

萬年社研究に関しては、まず山本武利先生が先鞭をつけられた。その後同社の旧蔵資料は、大阪市立大学などで整理が進んでおり、私の所属する大阪メディア文化史研究会でも、その歴史を調べ直し、本にまとめるべく研究活動を行っている。

その背景に、当時の「大大阪」の隆盛があったことは想像に難くない。関西圏の経済や人口の規模は、首都圏に匹敵するほどだったのである。

プロムナード

の要因も垣間見えてくる。この冊子には、32年に日本すなわち「帝国政府が満州国を承認するや直ちにこれに従い当社は商業的に同国を承認し、「着々と満蒙に進出しつつある」と記されている。要するに大陸への販路拡大のために、大阪は格好の拠点だったのである。



原武史氏の著書「民都」大阪対「帝都」東京」では、官主導の鉄道開発に対して、小林三三の阪急など、関西は民営鉄道のメッカであったと述べられている。たしかに「お上にまかせてられるかい！」は、関西の気風なのであろう。

だが阪神工業地帯の発展の前提に、大阪砲兵工廠や造幣局があったことは見逃せない。また大陸との距離の近さも、その繁栄の大きな要因となっていた。つまり民都・大阪は、「帝国の民都」でもあったのだ。

難波 功士

離の近さも、その繁栄の大きな要因となっていた。つまり民都・大阪は、「帝国の民都」でもあったのだ。その後、当然のことながら、日米開戦の頃にはフォードもGMも日本から撤退している。戦後、大陸への拠点としての大阪は、その意味合いを薄れさせていった。